

JICA 帰国研修員 Fatih Birgin さん 来訪

2013年1月～3月の間、JICA（独立行政法人国際協力機構）から受託し実施した「自然災害からの事前復興計画」研修の帰国研修員、イスタンブール市消防局のFatih Birgin（ファティス・ビルギン）さんが、2014年12月17日、再び神戸国際協力交流センターを訪れました。

ファティスさんが来日したのは、今回が4回目。JICA研修で講師を務めた専門家などから、自身の計画する事業に関する助言を得るために、これまでも自費で日本を訪れています。

2年前に参加した研修で、阪神淡路大震災の復興の取組みに触れたファティスさんは、この学びを基に、多くの計画を実行に移してきました。今回は、ファティスさんが自国で実施したこれまでの取組みと、今後の計画を報告するため、再び神戸国際協力交流センターを訪問されました。



神戸国際協力交流センターを再び訪れた、トルコ人帰国研修員ファティス・ビルギンさん（写真中央）。

「119番通報をしたら、何をどう伝えればいいか。」

ファティスさんは、イスタンブール市消防局で機械技師として、消防車などの消火機材等の開発・設計を任されています。その彼が、日本での研修で、起震車「ゆれるん」を体験しました。



日本での研修中、ファティスさんは、他の研修員とともに、地域総合防災訓練に参加し、起震車「ゆれるん」を体験しました。こうした車両が各地に赴くことで、被災経験のない市民にも、災害の恐ろしさを疑似体験する機会を与え、備えの重要性を実感してもらう事ができます。

「ゆれるん」からヒントを得て、ファティスさんが開発したのが「Mobile Training Truck（移動式訓練車）」です。これは、トラックの内部で、火災現場をシミュレーションし、緊急通報から消火作業まで、火災時の一連の対応を体験できる構造になっています。

「いざ、火災に直面した時、みなさんは冷静に119番通報ができるでしょうか。電話口で、火災の状況を的確に説明できるでしょうか。正しい方法で消火することができるでしょうか。」

この訓練車は、小学校などで出張訓練ができるよう移動性を重視した5mの車体のものから、キッチンや寝室などを模して、より臨場感のある火災現場体験ができる設備も装備した8mや12mの車体のものまで、3種類の車両があるそうです。日本のアイデアが取り入れられた、この画期的な移動式訓練車は、今後は、イスタンブール市を越えて、アンカラなどの他都市でも活躍が期待されています。

「このイスが、何になると思う？」

普段何気なく利用している公園。大きな地震などが起こった際には、第一次避難場所として使用される事があります。実際に、阪神淡路大震災でも、倒壊した家屋で発生した火災から逃れるため、多くの方が公園に避難しました。

神戸市灘区にある「六甲風の郷公園（六甲道北公園）」。ここは、災害時に防災拠点として活用されるため、防災倉庫や耐震性防火貯水槽のほか、仮設のトイレやかまどが設置されています。

普段はベンチやイスの形をしているこの設備は、災害時には、蓋をはずすなどの簡単な作業で、トイレやかまどとして利用することができます。ファティスさんは、このアイデアを取り入れ、イスタンブールにも防災公園を建設することを決意しました。

ちょうど一年ほど前の2013年12月、ファティスさんは、このアイデアを実現させるため、神戸を訪れました。この時、阪神淡路大震災の復興を支えた、多くの方々から助言をもらい、今では、イスタンブールでの防災公園建設の計画が、着実に進行しています。

ファティスさんによると、この防災公園は2015年6月もしくは7月ごろに完成予定とのこと。普段はサッカーやバスケットボールを楽しむことのできる公園が、災害時に人々の命を守る重要な拠点として、イスタンブールの街に登場する日が近付いています。

「35人のうち、27人が『地震に対する備えが出来ていない』と答えた。」

ファティスさんは、消防士として、大学などの場所を利用し、イスタンブール市民への防災教育も行っています。



JICA 研修「自然災害からの事前復興計画」（2013年1月～3月）での演習の様子。帰国後は、ファティスさんが進行役となって、イスタンブール市民を対象にした防災ワークショップを実施しています。

中でも、ファティスさんの呼びかけによって、35人の女性たちによる市民消防団が結成されました。地震時の緊急避難や火事が発生した際の消火など、緊急事態に備えた訓練を行っています。

なぜ、ファティスさんは、女性に「防災」を学んでほしいと考えたのでしょうか。

「子供たちにとって、母親はそばにいて守ってくれる絶対的な存在だ。そんな母親になる女性たちが防災力を身に付けてこそ、イスタンブールの将来にとって、大きな助けになる。」



「六甲風の郷公園」を視察。災害時、仮設トイレとして利用できる設備を見て、熱心に写真を撮る研修員。このアイデアが、イスタンブール市内でも、活かされようとしています。

消防団を結成した女性たちは全員、1999年のトルコ北西部地震を経験しています。それでもなお、結成当初、「今、次の地震が起こったとしたら、準備ができていますか？」という問いに、Yesと答えることができたのは、35人中8人だけだったそうです。

1995年の阪神淡路大震災からもうすぐ20年。

私たちは、「今、次の地震が起こったとしたら、準備ができていますか？」という問いに、何人がYesと答えられるでしょうか。

「今すぐ、早く、やらなければならない」

ファティスさんは、奇しくも、今回、阪神淡路大震災から20年を迎えるタイミングで、再び神戸を訪れました。そして、神戸市が記録した阪神淡路大震災発災直後の映像を鑑賞しました。

この映像を見たことで、ファティスさんは、自身の取組みが一刻も早く実現できるよう、急がなければならない、という思いを強くしたと言います。

明日、自分が存在する場所で、地震が起こらない、と断言できる人はいません。予期しない災害に襲われ、あたりまえの生活が奪われた時、「もっと早く、こうしていれば」と思っても、時間を戻すことはできないのです。

ファティスさんが学んだ阪神淡路大震災の教訓は、20年の時を経て、将来イスタンブール市を襲うかもしれない災害から、多くの人を守るための取組みとなって、生き続けています。

世界中で自然災害による犠牲者が後を絶たない今日、被災地である神戸の教訓を発信し続けることが、今もなお、求められています。そのことを、ファティスさんはこの度の訪問を通じて、私たちに教えてくれました。



「神戸港震災メモリアルパーク」
震災当時の姿を一部遺し、被害の大きさを今に伝えています。



「1.17 希望の灯り」
あの大災害から20年が経過しようとしている今、私たちは、災害の記憶を、どのようにして、後世に伝えていけるのでしょうか。

文責：曾輪 沙耶加